

中国の大学生の愛着スタイルが友情の質に与える影響に関する 青年心理学的研究

楊 洋 浅川 潔 司

(兵庫教育大学)

福井 紫帆 梶原 由貴 南 雅 則
(豊中市教育センター) (兵庫教育大学附属小学校) (宝塚市立長尾中学校)

本研究は、大学生の愛着スタイルと友情の質との関連を検討することを目的とした。中国の大学生253名(男性56名、女性197名)を対象に質問紙調査を行った。成人の愛着スタイルを測定するために、見捨てられ不安と親密性の回避の2つの下位尺度から構成される成人愛着スタイル尺度が用いられた。また、友情の質を測定するために、「活動の共有」「対立と裏切り」「相互信頼」「気遣い」の4つの下位尺度から構成される友情の質尺度を用いた。その結果、見捨てられ不安が「活動の共有」「対立と裏切り」「相互信頼」と関連しており、親密性の回避が「活動の共有」「対立と裏切り」と関連することが明らかにされた。これらのことから、見捨てられ不安と親密性の回避が強いほど、友情の質に影響を与えていると考えられる。また、友情の質は心理的適応、学校適応と関連していると考えられるので、大学生の愛着スタイルである見捨てられ不安と親密性の回避という情緒的な問題を改善することが友情の質、ひいては適応に影響を及ぼすと考えられる。

キーワード：成人愛着スタイル、友情の質、見捨てられ不安、親密性の回避、心理的適応、学校適応

楊 洋：兵庫教育大学大学院・学校心理・発達健康教育コース院生，〒673-1415 兵庫県加東市下久米942-1,

E-mail:yoyou0824@yahoo.com.cn

浅川潔司：兵庫教育大学大学院・発達人間教育専攻教授，〒673-1494 兵庫県加東市下久米942-1,

E-mail:kasa@hyogo-u.ac.jp

福井紫帆：豊中市教育センター・カウンセラー，〒673-1494 兵庫県加東市下久米942-1,

E-mail:kurenai1986@hotmail.com

梶原由貴：兵庫教育大学附属小学校教諭，〒673-0552 兵庫県三木市志染町中自由が丘2-404-2

E-mail:yuzuta_chise@yahoo.co.jp

南雅 則：宝塚市立長尾中学校・教諭，〒665-0868 兵庫県宝塚市中山荘園3-10

E-mail:nanchangenki@nifty.com

An Adlescent Psychological Study of the Effect of the Style of Attachment on Quality of Friendship in College Students in China

Yang Yang, Kiyoshi Asakawa
(*Hyogo University of Teacher Education*)

Shiho Fukui
(*Toyonaka City Center for Education*)

Yuki Kajiwara
(*Hyogo University of Teacher Education*)

Masanori Minami
(*Nagao Jr..High School*)

The present study was planned to investigate the relationships between college student's attachment styles and their quality of the friendship. Participants were 253 Chinese college student (56 male and 197 female). Adult attachment style were measured by the adult attachment scale which is consisted of "Anxiety about relationship" and "Avoidance of intimacy". The friendship quality scale is consisted of "Share of activity", "Mutual trust", "Conflict and Betrayal" and "concern". Results revealed that "Anxiety about relationship" related to "Share of activity", "Mutual trust" and "Conflict and Betrayal". whereas "Avoidance from intimacy" related to "Share of activity" and "Conflict and Betrayal." Those findings indicated that students who showed higher score on "Anxiety about relationship" and "Avoidance from intimacy" had a lower quality of friendship. The friendship quality were related to psychological adjustment and school adjustment. So we need to address the problem of "Anxiety about relationship" and "Avoidance from intimacy".

Key Words: Adult attachment style, friendship quality, Anxiety about relationship, Avoidance from intimacy, psychological adjustment, school adjustment

Yang Yang : Graduate School of School Education, Master's Program in School Psychology, Hyogo University of Teacher Education, 942-1 Shimokume, Kato-city, Hyogo 673-1415 Japan.

E-mail: youyou0824@yahoo.com.cn

Kiyoshi Asakawa : Professor, Development of School Psychology, Hyogo University of Teacher Education, 942-1 Shimokume, Kato-city, Hyogo 673-1415 Japan.

E-mail: kasa@hyogo-u.ac.jp

Shiho Fukui : Counselor at Toyonaka City Center for Education, 942-1 Shimokume, Kato-city, Hyogo 673-1415 Japan.

E-mail: kurenai1986@hotmail.com

Yuki Kajiwara : Attached Elementary School, Hyogo University of Teacher Education, 2-404-2 JiYuugaoka, XiJimiTyou, MiKi-city, Hyogo 673-0552 Japan.

E-mail: yuzuta_chise@yahoo.co.jp

Masanori Minami : Takatsukasa Junior High School, 3-10 Nakayamashoen, Takarazuka-city, Hyogo 665-0868 Japan.

E-mail: nanchangenki@nifty.com

問題と目的

Bowlby (1969) によれば、愛着 (attachment) とは、人が特定の他者との間に築く緊密な情緒的な結びつきである。彼の愛着理論によれば、乳幼児は社会的、精神的発達を正常に行うために、少なくとも一人の養育者と親密な関係を維持しようとする。すなわち、安心感を獲得するために養育者との近接性を保とうとする。

愛着に関する研究は、幼児を対象としたストレンジ・シチュエーション・テスト (Strange Situation Test, 以下 SST とする、Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall, 1978) によって飛躍的に発展した。

Ainsworth et.al (1978) は、養育者との分離場面における回避行動と再会場面における抵抗行動の組み合わせパターンの違いに従って、乳幼児の愛着の質を大きく、回避型、安定型、抵抗/アンビバレント型の3つに分類している。

青年期・成人期の愛着研究においては、個人の愛着スタイルを測定し、それと個人の環境への適応性や対人関係の質との関連を調べる研究がある。たとえば、愛着スタイル尺度を用いた Hazan & Shaver (1987) の結果では、愛着スタイルという概念が青年・成人期においても十分に適用可能であることを示しており、愛着行動は乳幼児期のみではなく、その後の人生を通して全般的に機能することを示唆していた (金政, 2007)。

その後日本では、詫摩・戸田 (1988)、戸田 (1991) が成人期の愛着研究をおこなっている。彼らは Hazan & Shaver (1987) の三つの愛着スタイルの記述を18の項目に再構成し、成人期の愛着スタイルを別々に測定した。

また Batholomew & Horowitz (1991) は Hazan & Shaver (1987) の尺度を受けながらも、愛着スタイルを Bowlby (1973) の理論に基づき、Relationship Questionnaire を開発した。Bowlby (1973) の愛着理論とは内的作業モデル (IWM) である。IWM は、自分は他者に愛される価値を持つかという自己の IWM、他者は自分を受容してくれるかという他者の IWM の2次元から捉えられ、そのバランスによって IWM の性質の違いを、愛着スタイルとして類型化する。そこで Batholomew & Horowitz (1991) は Bowlby (1973) の理論に基づき、青年・成人期においても自己ならびに他者への期待や信念という「自己モデル」、「他者モデル」の愛着2次元から解釈可能であるとの見解を示した。彼女たちは、自己観と他者観がそれぞれポジティブかネガティブかにより四つの愛着スタイル (安定型、拒絶型、とらわれ型、恐れ型) を構成するモデルを提出した。その後、Brennan, K.A., Clark, C.L., & Shaver, P. R. (1998) によって、理論的に「自己モデル」に対応する“見捨てられ不安”と、「他者モデル」に対応する“親密性の回避”の2次元が見出された。

Bowlby (1973) による内的作業モデルでは、人生の初期に対人関係の基本的な形が形成され、後の人生の対人関係の原型として影響を及ぼすとされた。また、Brennan et.al (1998) によると、“見捨てられ不安”とは、他者に見捨てられることへの不安、その関係を維持しようすることへの不安であり、“親密性の回避”とは、他者との親密さの回避や他者に心を開くことの拒否である。

そして、親密な対人関係中で特に友人関係は個人の意志によって選び、作れる関係であるといわれる (遠矢, 1996)。友人関係が成立するまえに、友人選択という行動があると考えられるが、友人選択は、自己認識や友情に対する認識と緊密に関わっているように思われる。ところで島山 (2009) によると、友情とは「友人関係において、相互の信頼関係を基礎として生まれる、愛着、尊敬、共感といった感情的結合のこと」である。しかし、この友情が最も重要な意義を持つのは青年期とされる。というのも、友人の存在が情緒的な安定を生み、青年の安心感の形成に資するからである。

日本では仲間や友だち、友情についての研究は多い (例えば、本郷, 1994; 岡, 1999)。これらの研究では、英語の peer を仲間、friend を友人、best friend を親友と翻訳して、欧米と同じような親密な同年齢の関係を扱っていると考えてきた。

中国の友情や友人観についての研究もある。高木・黄 (1995) が大学生の対人態度の性差を調査した結果によると、中国の大学生では、「信頼・感情」の傾向は男子の方が女子よりも高いが、「孤独」は男子よりも女子の方が高い。つまり、友人関係の中に男女のそれぞれが友人に対する満足感が違うことが示唆された。友情が友人との「感情的結合」だとするならば、友人関係の変化は友人との感情的な結合にも変化をもたらし、ひいては友情そのもののあり方にも関係してくると考えられる。この文脈においては、友人関係という親密な対人関係、つまり、友人関係の持ち方が友情の質に影響を与えることも明らかとなった。

一方、詫摩・戸田 (1988) によると、安定型の愛着を有する個人はこのような対人関係の中に「幸福」、「友愛」、「信頼」などの情緒を感じやすいと考えるのは妥当であろう。また、回避型とアンビバレント型の個人は恋愛と友人関係の中で、相手となかなか親しくなれないし、親しそうにふるまわれることを迷惑と感じやすいことが明らかになった。

また、Bowlby (1973) の愛着の内的作業モデルによると、仲間との相互作用が乳幼児期から存在し、その後の仲間関係に影響を与えると示唆された。そこで、青年期の友人関係が、それ以前の母子関係の影響を受けている先行研究も数多くある。たとえば、久保田 (1995) は大学生を対象として対人関係の内化モデルの発達を検討

するための調査を行い、子どもの頃を回想した母親との関係と、他者との関係を求める親和傾向との関連性を検討した。親和傾向の下位尺度を検討した結果、友人との親密性を求める傾向が低い学生は、親密性を求める学生に比べて思春期に母親に対する拒否・軽蔑の得点が高いことが示された。青年期の愛着スタイルと友人関係における適応性との関連についての研究結果(金政2007)によると、青年期の愛着スタイル次元の親密性の回避が高い場合は、対人関係でネガティブな感情を経験しやすく、また、相手の心理状態をうまく察して、その場に応じた適切な行動をとることが難しくなると考えられる。そこから青年期の愛着スタイルが友人関係に影響を与えることも示された。

これまでの研究において、友人関係に対しても愛着を求める傾向があることや、青年期の友人関係は成人での対人関係の質や心理的な幸福と関連していることがわかった。そして、友人関係の問題が学校適応に対して影響を与えるということも明らかにされている(大久保, 2005)。また、仲間受容性と友情は両方とも青年の自尊感情と心理的な適応感の改善には影響がある(Parker & Asher, 1993)。このように、青年期の友情の質は適応感の1つの部分を考慮すると、本研究において、青年期の愛着スタイルが友情の質に及ぼす影響を検討することは意義深いものであると言えるであろう。

そこで、本研究ではこれまで主として乳幼児期の親子関係(特に母子関係)において用いられてきた愛着理論を中国人大学生にも適用し、中国の大学生の友情の質に与える影響を検討する。その際、青年期の愛着スタイルと友情の質との関連をより明らかにするために、愛着スタイルの二次元である「見捨てられ不安」と「親密性の回避」を用いて、それと友情の質との関連を検討することとした。

方法

調査対象：中国の海南省のA大学の学生253名(男子56名、女子197名)が研究協力者として本研究に参加した。

質問紙：本研究においては、次の二つ尺度が使用された。

①一般他者を想定した愛着スタイル尺度

青年・成人期の愛着の二つの次元である「見捨てられ不安」(18項目)と「親密性の回避」(12項目)を測定するために本尺度が中国語に翻訳されて使用された。本尺度はBrennan, Clark & Shaver (1998)が開発したThe Experiences In Close Relationships Inventory The Generalized Other Versionに基づくものであり、中尾・加藤(2004)によって日本語に翻訳されたもので、中尾・加藤(2004)によってその妥当性は検証されている。反応は「非常に当てはまる」(4点)、「かなり当てはまる」

(3点)、「少し当てはまる」(2点)、「まったく当てはまらない」(1点)の4件法で回答が求められた。

②友情の質尺度

中国人青年の友情についての態度を測定するにあたっては、Parker & Asher (1993)によって作成された友情の質尺度が中国語に翻訳されて使用された。翻訳したのは、中国語と日本語の理解ができる心理学専攻の大学院生であった。本尺度は、「信頼と思いやり」、「もめごとの解決」、「対立と裏切り」、「ヘルプとガイダンス」、「仲間とレクリエーション」、「親しい交流」の6つの下位尺度からなり、計40項目で構成されていた。反応は「非常に当てはまる」(4点)、「かなり当てはまる」(3点)、「少し当てはまる」(2点)、「まったく当てはまらない」(1点)の4件法で回答が求められた。

要因計画：青年・成人期の愛着スタイルの二次元である「見捨てられ不安」と「親密性の回避」を独立変数とし、友情の質を従属変数とし、2(性)×3(青年・成人期の愛着スタイルの水準)の2要因計画に基づいて分析することとした。

手続き：授業の間の休み時間を利用して集団場面において本調査は実施された。研究者からの教示として、1)この調査は学校の成績とは無関係であること、2)個人の秘密は守られること、3)回答したくない人は回答しなくてもよいという権利があること、4)調査内容は研究の目的にそってのみ使用されることが伝えられた。

結果

1、各尺度についての因子分析の結果

①友情の質の測定尺度の因子分析結果

友情の質測定尺度において、今回は大学生の友情の質を測定するために、友情の質を測定する尺度(40項目)に対し、有効回答者(253名)の回答に基づき、主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。因子負荷量.40とし因子の解釈をした結果、解釈可能な4因子26項目が抽出され、第一因子を「活動の共有」、第二因子を「対立と裏切り」、第三因子を「相互信頼」、第四因子を「気遣い」と命名された。全体の $\alpha = .86$ 、第一因子が $\alpha = .89$ 、第二因子が $\alpha = .83$ 、第三因子が $\alpha = .75$ 、第四因子が $\alpha = .72$ であった(table 1参照)。

②一般他者を想定した愛着スタイル尺度の因子分析結果

青年期の一般他者を想定した愛着スタイルを測定するために、一般他者を想定した愛着スタイル尺度(30項目)に対し、有効回答者(253名)の回答に基づき、主因子法、プロマックス回転による因子分析を行ったところ、明確な2つの因子が得られた。また、2つの因子間の相関は.09と、ほぼ直交していた。

2因子がほぼ直交していたので、主因子法、バリマックス回転による因子分析を行った。因子負荷量.40とし

table1 大学生の友情の質尺度の因子分析結果(主因子法—プロマックス回転)

	第一因子	第二因子	第三因子	第四因子
第一因子 「活動の共有」 $\alpha = .89$				
B-12 いつも昼ごはんを一緒に食べる。	.753	.142	-.177	-.076
B-14 煩雑な事をよく互いに手伝う。	.750	.026	.036	-.064
B-26 いつも物の貸し借りをする。	.729	.045	-.115	-.004
B-15 お互いの思いを共有する。	.635	.037	.132	.029
B-23 問題を解決するために、アドバイスをくれる。	.581	-.082	.027	.038
B-7 お互いの家に行き来する。	.576	-.081	.205	.006
B-9 いつも休み時間に一緒に遊ぶ。	.558	-.034	.154	.011
B-11 私たちが喧嘩をしても、簡単に仲直りできる。	.553	-.075	.083	.006
B-24 私に起こった不愉快な出来事について相手に話す。	.547	-.128	.073	.086
B-33 いつも一緒に楽しいことをする。	.526	-.192	-.063	.171
B-28 特別な好意をお互いに持っている。	.433	.092	.242	.049
第二因子 「対立と裏切り」 $\alpha = .83$				
B-22 よく言い争いをする。	.152	.880	.051	.012
B-18 よく相手を困惑させる。	-.053	.747	.079	.013
B-27 よく喧嘩をする。	.016	.703	.036	.021
B-17 私の話をぜんぜん聞いてくれない。	-.054	.681	-.029	.043
B-19 よく他の人に私の悪口を言う。	-.057	.570	.040	.019
第三因子 「相互信頼」 $\alpha = .75$				
B-3 お互いの存在に重要性和特別性を感じさせてくれる。	.138	.019	.721	-.078
B-2 プライベートな事について話す。	.140	.079	.589	-.125
B-5 悲しいことをお互いに話す。	.188	-.041	.573	-.067
B-4 私にとっても賢いと言ってくれる。	-.209	.131	.543	.157
B-6 もし他の人が私の悪口を言っていたら、私を守ってくれる。	-.047	-.034	.520	.244
第四因子 「気遣い」 $\alpha = .72$				
B-36 もし相手が私を傷つけたら、謝ってくれる。	-.255	-.124	.167	.660
B-34 遊ぶときに良いアイデアを出してくれる。	.295	.149	-.225	.636
B-35 いつも私たちの問題について話し合う。	.028	.163	-.022	.562
B-37 物事を成し遂げるための良いアイデアをお互いに出す。	.081	-.189	.022	.541
B-40 お互いに怒っているとき、その解決策を話し合う。	.070	.113	.115	.422
	I	II	III	IV
二乗和	7.06	3.52	5.23	4.32
累積寄与率	28.99	9.96	3.89	2.47
因子相関	I	II	III	IV
I	—	-.355	.697	.613
II		—	-.181	-.147
III			—	.452
IV				—

table2 一般他者を想定した愛着スタイル尺度の因子分析結果(主因子法一バリマックス回転)

	第一因子	第二因子	共通性	
第一因子 「見捨てられ不安」 $\alpha = .87$				
A-30 私は一人ぼっちになってしまうのではないかと心配する。	.684	-.031	.469	
A-28 私は、見捨てられるのではないかと心配だ。	.680	.066	.467	
A-12 私は人に自分のことを好きになってもらうことができなかつたら、私はきっと気が動転して、悲しくなったり腹が立ったりする。	.646	.050	.420	
A-26 私はいつも、人が私に対して抱いていてくれる気持ちと、私が人に対して抱いている気持ちと同じくらい強ければいいのになあと思う。	.642	-.031	.414	
A-17 私は、人にもっと自分の感情や自分たちの関係に真剣であることをしめさせようとしているのを感じる事がときどきある。	.606	.003	.367	
A-25 私は誰かと付き合っていないと、何となく不安定な気持ちになる。	.603	-.208	.407	
A-21 私は、知り合いを失うのではないかとけっこう心配している。	.564	-.015	.318	
A-18 私は、知り合いが私のことをほっといて自分ひとりで何かをすることが重なってくると腹が立ってきてしまう。	.552	.129	.321	
A-11 私は、私がいてほしいと望むぐらいに人がそばにいてくれないと、いらいらしてしまう。	.528	-.034	.280	
A-10 私には、人が私に対して好意的であるということを何度も何度も言うてくれることが必要だ。	.525	.130	.293	
A-4 私が人のことを大切に思うほどには、人が私のことを大切に思っていないのではないかと私は心配する。	.516	-.191	.303	
A-8 私は、人が必要なときにいつまでも私のためにいてくれないといらいらする。	.511	.005	.261	
A-23 私は、いろいろな人との関係について、非常に心配している。	.497	.284	.327	
A-14 人にだめだなあといわれると、自分は本当にだめだなあと感じる。	.450	.172	.232	
A-9 私があまりにも気持ちの上で完全にひとつになることを求めるがために、ときどき人はうんざりして私から離れていってしまう。	.427	.253	.246	
A-13 私が親密になりたいと望むほどには、人は私と親密になりたいと思っていないと私は思う。	.416	.171	.202	
第二因子 「親密性の回避」 $\alpha = .73$				
A-15 私は人に心を開くのに抵抗を感じる。	.062	.740	.552	
A-16 心の奥底で何を感じているかを人に見せるのはどちらかというと好きではない。	.187	.668	.481	
A-3 * 私は、心の奥底にある考えや気持ちを人に話すことに抵抗がない。	-.245	.580	.397	
A-6 私は人とあまり親密にならないようにしている。	.142	.461	.233	
A-27 私は人とあまりに親密になることがどちらかというと好きではない。	.084	.456	.215	
A-1 * 私は比較的容易に人と親密になれると思う。	-.121	.445	.213	
※*は逆転項目				
	二乗和	5.14	2.28	7.42
	累積寄与率	23.37	10.35	33.72

table3 愛着スタイル下位尺度見捨てられ不安水準の性と群の友情の質得点平均値及びSD

群	性	N	活動の共有		対立と裏切り		相互信頼		気遣い		
			mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	
見捨てられ不安	L	男	15	30.40	6.42	6.67	2.41	13.00	2.59	12.80	2.83
		女	69	33.09	6.31	6.51	2.11	13.42	2.65	13.46	2.63
	M	男	19	29.63	5.33	7.84	2.79	12.32	2.16	13.84	2.06
		女	64	32.28	6.56	7.17	2.32	13.63	2.93	12.80	3.19
H	男	22	30.50	4.45	10.86	3.19	14.36	2.06	13.82	2.77	
	女	64	33.88	5.84	8.55	3.06	15.03	2.43	13.45	2.44	

table4 愛着スタイル下位尺度親密性の回避水準の性と群の友情の質得点平均及びSD

	群	性	N	活動の共有		対立と裏切り		相互信頼		気遣い	
				mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD
親密性の回避	L	男	11	30.91	6.77	7.09	2.98	13.45	2.16	12.73	3.16
		女	62	34.92	6.60	6.47	2.05	14.97	2.30	13.23	2.79
	M	男	22	31.27	5.19	8.41	3.66	13.14	2.43	14.32	2.37
		女	75	33.71	5.79	7.60	2.72	14.12	2.83	13.67	2.68
	H	男	23	28.78	4.33	9.78	2.92	13.39	2.51	13.22	2.33
		女	60	30.50	5.62	8.07	2.87	12.88	2.73	12.73	2.84

因子の解釈をした結果、解釈可能な2因子22項目が抽出され、第一因子は「見捨てられ不安」、第二因子は「親密性の回避」と命名された。愛着の全体尺度の $\alpha = .84$ 、見捨てられ不安は $\alpha = .87$ 、親密性の回避は $\alpha = .73$ であった (table 2 参照)。

2、青年期の愛着スタイルと友情の質の関係

上述の分析結果に基づき、一般他者を想定した愛着スタイル尺度の二つの下位尺度ごとに、それぞれの平均値とS.D.に基づいて、各スタイル高得点群 (H群、平均得点+1/2S.D.以上) と得点低群 (L群、平均値-1/2S.D.未満)、及び中間群 (M群、H群とL群の間) の3群に分類された。青年期の一般他者を想定した愛着スタイル各下位尺度別の性と水準別の友情の質得点平均と標準偏差は table 3、table 4 に示す通りであった。そこで友情の質測定尺度の各下位尺度得点を従属変数、性と一般他者を想定した愛着スタイル尺度の各下位尺度得点水準を独立変数とする2 (性) × 2 (見捨てられ不安、親密性の回避) の2要因分散分析を行った。

性と「見捨てられ不安」による友情の質の分散分析の結果において、「活動の共有」には、有意な性の主効果が見られ、女性群の得点が男性群より有意に高くなっていた ($F(1.247) = 10.01, p < .01$)。「対立と裏切り」には、有意な水準群の主効果が見られ ($F(2.247) = 22.33, p < .001$)、下位分析の結果、L群≒M群<H群という関係で有意差が認められた。性の主効果も有意 ($F(1.247) = 6.95, p < .01$) であり、女性群より男性群得点が顕著に高くなっていた。「相互信頼」には、群の主効果が見られ ($F(2.247) = 8.04, p < .001$)、L群≒M群<H群という関係で有意差が認められた。性の主効果も有意 ($F(1.247) = 4.06, p < .05$) であり、男性群より女性群の方が著しく高くなっていた。「気遣い」には、主効果及び交互作用も有意ではなかった。

性と「親密性の回避」による友情の質の分散分析の結果において、「活動の共有」には、主効果が見られ ($F(2.247) = 5.42, p < .01$)、下位分析 (Tukey法、以下も同様)、L群≒M群>H群という関係であることがわかった。そして、有意な性の主効果も見られ、男性群より女

性群の活動の共有得点が顕著に高くなっていた ($F(1.247) = 8.61, p < .01$)。「対立と裏切り」得点には、主効果が見られ ($F(2.247) = 7.40, p < .01$)、下位分析の結果、L群<H群という関係で有意差が認められた。性の主効果も有意 ($F(1.247) = 5.85, p < .05$) であり、女性群より男性群の得点が有意に上回っていたが、愛着スタイルと性の交互作用は有意ではなかった。「相互信頼」と「気遣い」には、いずれの主効果及び交互作用も有意ではなかった。

考察

性差について

上記の結果から、青年期の愛着スタイルの下位尺度ごとに見ると、「見捨てられ不安」水準でいえば、活動の共有と相互信頼においては、男性群より女性群の得点が有意に高い、女性のほうが男性よりも友だちのことを信頼し、よく一緒に食事をし、活動を参加することといえる。女性より男性の方が対立と裏切りの得点が有意に高い傾向にあるともいえる。長沼・落合 (1998) は、青年期の同性の友達との付き合い方においては、男女の差異として、女性は同性の友人と密着した関係を持つ付き合い方をし、男子はありのままの自分といった内面を同性の友人に表出せず心理的距離を取り、互いに分離した関係を持っているという。つまり、女性は友人関係の中で友だちと一緒に活動を取り、お互いのことを信頼する付き合い方を取っていると考えられる。また、金政 (2007) によると、女性が見捨てられ不安は葛藤の高さと関連する。今回の結果は、女性より男性の方が対立と裏切りを有意に高い傾向にあるともいえる。

親密性の回避水準では、男性群より女性群の方が活動の共有を有意に高い傾向にあるといえる。女性より男性の方が対立と裏切りを有意に高める傾向にあるとも言える。丹羽 (2002) によると、男性は他者から分離し、自律的に行動することが多く、女性より対人関係への志向性が低い傾向にある。女性は対人関係への志向性が高く、親密な関係を形成、維持しようとする傾向にある。つまり、男性は他者に依存せず、自律的な行動が主体となり、

女性よりも友人との心理的距離が大きいため、友人への親密性を形成しようとせず、気を遣うことが少ない、活動の共有が少なく対立と裏切りの行動が多いと思われる。

愛着スタイルと友情の質との関連について

青年期の愛着スタイルの下位尺度ごとに見ると、「見捨てられ不安」水準でいえば、その低群、中群より高群の方が友人間の対立と裏切りは有意に高いということがわかった。この結果については、見捨てられ不安水準の高い学生群は友だちのことをうまく理解できなくて対立と裏切りの行動が起りやすい。そこから見捨てられることへの安定的な情緒を持つためには対立と裏切りを低めて友情の質を高める必要があると考えられる。この点については、詫摩・戸田(1988)が成人の愛着スタイルと対人関係との間には関連があることを示唆しているが、安定傾向の高い人は「幸福」、「友愛」「信頼」などの情緒を体験しやすい。また、見捨てられ不安と関係満足度との間には関連があることを示しており、この結果は、恋愛関係での愛着スタイルと関係満足度が関連するとする金政(2007)の見解と一致する。

また、青年期の愛着スタイルの下位尺度「親密性の回避」水準でいえば、その高群より中群、低群の方が活動の共有は有意に高いということが明らかになった。そして、その低群より高群の方は友人の間の対立と裏切りが高いということも明らかになった。Mikulincer(1998)によると、愛着次元の「親密性の回避」の高さは、対人関係での敵意や怒りの感じやすさと関連することを報告されていた。つまり、「親密性の回避」が高い場合、対人関係でネガティブな感情を経験しやすく、また、相手の心理状態をうまく察して、その場に応じた適切な行動を取ることが難しくなり、対立と裏切りのようなことを起りやすいと考えられる。金政(2007)によると、愛着次元の親密性の回避が高くなると、友人との関係の親密さ自体を基本的に低く評定する傾向がある、もしくは友人と親密な関係をうまく築けていないという可能性を示唆するものであったと言える。つまり、親密性の回避が高い大学生は友人と親密な関係をうまく築けていないから、活動の共有も低くなる。逆に、友人に対する対立と裏切りが高くなることを明らかにした。一方、詫摩・戸田(1988)は回避傾向やアンビバレント傾向の高い人は親しそうにふるまわれることを迷惑に感じやすいと言うが、上述の結果は詫摩・戸田(1988)と金政(2007年)の見解を支持するものともいえる。親密性の回避は、友人とよい関係を結べなくてうまく交流が取れない状況であるため、活動の共有が少なくなる、友人を信頼できないため、対立と裏切りの行動が多くなるという本研究の結果から、友人を信頼して心を開いて親密関係を回避しないことは対立と裏切りの行動を低めて親密な友人関係

が形成されることにつながると考えられる。

まとめにかえて

青年期の友情と仲間受容性は青年の自尊感情と心理的適応感の改善には影響を与える(Parker & Asher, 1993)。友情は対人関係の中の一部と考慮すると、大学生の心理適応感を改善するために、友情の質を高めることが必要である。つまり、友人関係において関係への不安と友人に対する親密性の回避という情緒的な不安と回避感情を改善すると、友情の中の活動の共有や相互信頼も高くなり、対立と裏切りというネガティブなことも減らすことになり、友人の間の友情の質を高めることが可能だと考えられる。

今後の課題

本研究では、大学生の愛着スタイルと友情の質との関連を明らかにしたが、その愛着スタイルの二次元である「見捨てられ不安」、「親密性の回避」という情緒的な問題をもつ大学生に具体的にどのように支援し、改善するのかを明らかにする必要があると思われる。

引用文献

- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M.C., Waters, E., & Wall, S. 1978 Patterns of Attachment. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Assoc.45-64.
- Batholomew, K., & Horowitz, L. M. 1991 Attachment styles among young adults: A test of a four-category model *Journal of Personality and Social Psychology* 61, 226-244.
- Bowlby, J. 1969 Attachment and loss, Vol.1: Attachment. New York: Basic Books.
- Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. 1998 Self-report measurement of adult attachment: an integrative overview. In J. A. Simpson & W. S. Rholes (Eds.) *Attachment theory and close relationships*. New York: The Guilford Press Pp.46-76.
- 遠藤利彦 2005 愛着理論の基本的枠組み 数井みゆき・遠藤利彦(編著) アタッチメント:生涯にわたる絆 ミネルヴァ書房. Pp.1-31.
- 畠山 寛 2009 共感を基礎とした社会性発達の検討: 思いやり 攻撃 友情(自主シンポジウム a7) 日本教育心理学会総会発表論文集 51, S50-S51.
- Hazan, C., & Shaver, P.R. 1987 Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 511-524.
- 本郷一夫 1994 仲間関係 日本児童研究所(編) 児童心理学の進歩1994年版 金子書房 Pp.227-253.
- 金政祐司 2007 青年期の愛着スタイルと友人関係における適応性との関連 社会心理学研究 第22巻第3号,

- 274-285.
- 加藤 司 2001 対人ストレス過程の検証教育心理学研究 49, 295-304.
- Klinger, E. 1977 Meaning and void: Inner experience and the incentives in people's lives. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Mikulincer, M. (1998). Adult attachment style and individual differences in functional versus dysfunctional experiences of anger. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 513-524.
- 久保田まり 1995 アタッチメントの研究—内的ワーキングモデルの形成と発達 川島書房.
- 中尾達馬・加藤和生 2004 一般他者を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究, 5, 19-27.
- 長沼恭子・落合良行 1998 同性の友達との付き合い方から見た青年期の友人関係 青年心理学研究, 10, 35-47.
- 丹羽智美 2002 青年期における親への愛着が友人関係に及ぼす影響: 環境移行期に着目して 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 心理発達科学 49, 135-143.
- 岡 隆 1999 友人関係 日本児童研究所(編) 児童心理学の進歩1994年版 金子書房 Pp.159-186.
- 大久保智生 2005 青年の学校への適応感とその規定要因—青年用適応感尺度の作成と学校別の検討—教育心理学研究, 53, 307-319.
- Parker, J.G., & Asher, S.R. 1993 Friendship and friendship quality in middle childhood: Links with peer group acceptance and feelings of loneliness and social dissatisfaction. *Developmental Psychology*, 29, 611-621
- Simpson, J.A. 1990 Influence of Attachment style on romantic relationship. *Journal of Personality and Social Psychology*, 59, 971-981.
- 高木秀明・黄毓芳 1995 日中青年の自己意識、対人態度、親子関係に関する比較研究(共著) 横浜国立大学教育紀要 第35集巻(頁 1-18)
- 詫摩武俊・戸田弘二 1988 愛着理論から見た青年の対人態度——成人愛着スタイル尺度作成の試み——東京都立大学人文学報第196号, 1-16.
- 戸田弘二 1988 青年後期における基本的対人態度と愛着スタイル: 作業仮説 (working models) からの検討 日本心理学会第52回大会発表論文集 27
- 戸田雅子 2004 青年期の登校回避感情について—対人関係及びパーソナリティの視点から— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 心理発達科学51, 312-314.

謝辞: 本研究を遂行するにあたって、データ収集にご協力いただいた海南師範大学の唐玲先生に心より感謝致します。

(2012. 8. 29受稿, 2012. 11. 19受理)